

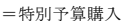
京都国立近代美術館 収集の概要（令和4年度）

京都国立近代美術館は、関西さらには西日本において近現代の美術・工芸を扱う中心的な機関として活動することを目的とし、地域性に目配りしつつも、日本の近現代美術史の核となる作品や、代表的作家の各時代における重要作品を積極的に収集している。さらに、世界における日本の美術・工芸の位置づけを常に考えることを旨とし、その影響関係に係る国外の近現代美術の収集にも取り組み、加えて收藏作家のジェンダーバランスにも配慮するよう努めている。

令和4年度も以上の方針を踏襲し、多様なジャンルの作品を収集した。中でも、戦後の前衛陶芸運動を牽引した八木一夫の代表作《ザムザ氏の散歩》を含む作品75点を一括収蔵したことは特筆に値する。すでに収蔵している51点と併せて、八木の創作活動を総覧できる環境を整えることができた。他に陶芸では、樂直入《焼貫黒茶碗》や深見陶治《吃》、鈴木康之《芽》といった各作家の代表作や、ウィーン工房の女性デザイナーであるキッシ・リックスの陶彫作品2点を購入し、漆芸では黒田辰秋の稀少作品《朱漆三面鏡》、洋画では小出楢重の代表作で珍しい裸婦像である《裸女結髪》を、日本画では最近注目される大阪画壇の深田直城《瀑布に鷹・雪中鶯菴図》を購入し、コレクションの更なる充実化を図った。

今年度から充実化重点領域となった現代作家の作品としては、当館が作品の主題ともなっている森村泰昌《星男》に加え、笠原恵実子や竹村京といった女性作家に注目し作品を購入した。

京都国立近代美術館 美術作品購入一覧（令和4年度）



1		種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：陶彫 猫 制作年：1938（昭和13）年頃 材質・形状：陶器 寸法：43.0(h)×12.0×15.0 cm 解説：オブジェ焼の先駆者として知られる八木一夫の最初期の作品。八木は沼田一雅に師事するなどして陶彫を学んだが、対象のプロポーションを縦に引き伸ばして表現した本作は、写実的に対象を描き出すのではなく、抽象的に表現する試みによる。全体にかけられた艶をおさえた黒釉がモチーフの抽象性を際立たせている。
		取得額：1,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
2		種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：野兎の陶彫 制作年：1939（昭和14）年 材質・形状：陶器 寸法：19.4(h)×28.8×14.8 cm 解説：八木の最初期の陶彫作品の一つ。野兎の動きの瞬が形象化されたこの時期の代表作。細かな土の塊を表面に張り付けることから生じる素材感の表現と灰釉が素朴ながらも作品に強さを与えている。
		取得額：1,200,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
3		種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：搔落向日葵図壺 制作年：1947（昭和22）年 材質・形状：陶器 寸法：31.2(h)×21.2×21.2 cm 解説：青年作陶家集団の第1回展に出品された作品。この時期の八木は向日葵をモチーフとした作品をいくつか制作しているが、本作では一連の作品の中でも比較的写実的に向日葵が表現されている。轆轤で成形した壺に化粧土をかけ、それを搔き落すことで模様が表現されており、中国陶磁の制作手法を現代的に応用した1点。
		取得額：3,700,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

4 ★	種別：陶芸 作者名：八木一夫 (1918～1979) 作品名：春の海 制作年：1947（昭和22）年 材質・形状：陶器 寸法：22.0(h)×19.0×20.0 cm 解説：轆轤で制作した球体に、尻尾と鰭、目、口をつけて河豚に見立てた第2回青年作陶家集団点の出品作。鉄分の多い灰色地に白土を象嵌し、その上から白い化粧土が掛けられている。これは朝鮮王朝時代の粉青沙器（いわゆる三島手）の技法の応用である。さらに色釉で花卉文が表現されており、全体として春の穏やかさを身にまとった作品となっている。 取得額：2,700,000円 展示予定：本年度の走泥社再考展に出品予定
5 ★	種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：春の海 制作年：1947（昭和22）年 材質・形状：陶器 寸法：22.0(h)×18.0×19.0 cm 解説：化粧土と色釉を用いた同名の作品の姉妹作。こちらは非常にシンプルに轆轤で球体を成形後に尻尾、鰭、目、口をつけ、灰釉をかけただけの作品である。装飾的な魅力に乏しいながらも、登り窯で焼成されたことによる陶器の質感がやきものとしての「味」を生み出している。 取得額：2,500,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
6 ★	種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：白化粧鉄絵壺 制作年：1948（昭和23）年頃 材質・形状：陶器 寸法：25.0(h)×27.0×27.0 cm 解説：轆轤で成形された球体の壺に鉄絵で文様が描かれた作品。白化粧に鉄絵というこの作品にみられる加飾法は中国の磁州窯で用いられていた手法である。八木はこのような古典的な手法に対して、新しいイメージを表面に施していくことで現代の陶芸作品のあり方を模索していた。なお、装飾モチーフはデフォルメされた猪である。 取得額：2,800,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
7 ★	種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：白化粧鉄絵壺 制作年：1948（昭和23）年頃 材質・形状：陶器 寸法：33.0(h)×23.5×23.5 cm 解説：轆轤で成形された下部からラッパ状に口が開く形の花器。白化粧に鉄絵というこの作品にみられる加飾法は中国の磁州窯で用いられていた手法である。ただし、八木はエッチングのように硬質な線でモチーフである向日葵を描いており、シャープな印象を与える。古典的な手法に対して、新しいイメージを表面に施していくことで現代の陶芸作品を模索していた時期の作品である。 取得額：2,800,000円 展示予定：本年度の走泥社再考展に使用予定

8 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918～1979) 作品名 : 鉄象嵌一輪指 制作年 : 1949 (昭和24) 年 材質・形状 : 陶器 寸法 : 34.0 (h) × 7.0 × 7.0 cm 解説 : 轆轤で成形した幾何学文をもつ瓶型の一輪挿し。この時期の特徴である化粧土による白地に鉄系の顔料による黒の装飾が施されている。ただし、本作では筆などを用いて図柄を描くのではなく、線彫り後に顔料を象嵌するという、染付などでみられる手法が用いられている。 取得額 : 1,000,000円 展示予定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
9 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918～1979) 作品名 : ザムザ氏の散歩 制作年 : 1954 (昭和29) 年 材質・形状 : 陶器 寸法 : 27.5 (h) × 27.0 × 14.0 cm 解説 : 1954年の走泥社展に出品され、同年から翌年の八木の個展でも展示された戦後日本の現代陶芸を語るうえで不可欠の作品。轆轤で成形された円筒系のパーツで構成され、条痕釉と呼ばれる灰釉がかかる。1960年代後半以降に再評価が進み、現在ではオブジェ焼の記念碑的作品とも称されている。 取得額 : 42,000,000円 展示予定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定
10 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918～1979) 作品名 : 月 制作年 : 1954 (昭和29) 年 材質・形状 : 陶器 寸法 : 17.0 (h) × 22.5 × 19.5 cm 解説 : 《ザムザ氏の散歩》と同様に轆轤で成形され、円筒形の口がつく。煎餅のような平らな形に対して、円の両側から半円形になるように黒釉が掛けられている。1954年の走泥社展に出品されたもので、この時期の八木の造形的な特徴をよく示す優品。 取得額 : 3,500,000円 展示予定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定
11 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918～1979) 作品名 : 歩行 制作年 : 1957 (昭和32) 年 材質・形状 : 陶器 寸法 : 50.0 (h) × 24.0 × 11.0 cm 解説 : 八木同様に走泥社同人であった河合紀との二人展に出品されたのち、同年に開催のミラノトリエンナーレ国際工芸展でも展示された作品。小さなブロックを積み木のように積み上げたもので、ブロックのゆがみと積み上げた際のバランスからくる動きの感覚が、まるで歩行しているかのような情景を生み出す。八木は最初期は釉薬や化粧土を用いていたがこの時期になると無釉焼き締めによる作品が制作の柱の一つになっている。 取得額 : 7,500,000円 展示予定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定

12		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 黒陶作品 制 作 年 : 1957 (昭和32) 年頃 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 49.5 (h) × 16.8 × 9.0 cm 解 説 : 第14回走泥社展に出品された作品。この時期から八木は無釉焼き締めと並んで黒陶を制作の柱の一つに据える。本作は《歩行》と類似の造形となっているが、ブロックを積み上げるのではなく上下二つのパーツで構成されている。黒陶は中国古代の技術ですたれていたものを八木が土の新たな材質感を求めて再発見したものである。 取 得 額 : 2,000,000円 展 示 予 定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定
13		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 壁体 制 作 年 : 1963 (昭和38) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 52.0 (h) × 37.0 × 7.5 cm 解 説 : 前後に薄い板状の土の壁を細い土の棒でくっつけたもので、表面はいわゆる皺寄せ手の手法で造形されている。これは薄い土の板をつまむなどしてあたかもしわが寄ったかのようにみせる八木を代表する装飾技法である。土味が親しさの感覚において愛でられてきたことに対するアンチテーゼの意味合いを持つと考えられる。 取 得 額 : 6,500,000円 展 示 予 定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定
14		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 金彩 装ったオブジェ 制 作 年 : 1963 (昭和38) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 48.0 (h) × 5.5 × 8.0 cm 解 説 : 細長い棒状の作品で、最下部には足、最上部にはくしゃくしゃに丸められたような球がつく。伸び縮みするストローを縮めたかのような輪状の皺を有しており、全体が金彩で覆われている。八木特有の人を困惑させるタイトルがつけられている。 取 得 額 : 2,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
15		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 衣 制 作 年 : 1963 (昭和38) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 25.0 (h) × 21.0 × 29.0 cm 解 説 : 立方体のような形状に、膨らみと凹み、でっぱりなどの造形要素がつくこの時期の代表作の一つ。1964年の個展で展示されている。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取 得 額 : 5,000,000円 展 示 予 定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定

16 	種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 小町のギブス 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 37.0 (h) × 22.7 × 34.0 cm 解 説 : 座椅子のようにL形に折れ曲がる形状の無釉焼き締めによる作品。大小様々に穴が開き、内部の空間を示唆している。また、表面につけられた切断されたようなあとは、八木が意図的に作り込んだものである。これは、例えば同時期に活躍し、日本でも盛んに紹介されていたイタリアのルーチョ・フォンタナのキャンパスを切った作品との共通性が見てとれるように、外部からの刺激を巧みに自身の表現に取り込む八木の制作態度がよくわかる作家の代表作である。 取 得 額 : 7,000,000円 展 示 予 定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定
17 	種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 作品 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 32.0 (h) × 23.5 × 25.0 cm 解 説 : 型、もしくはタタラ板で制作された箱型の形状の表面に穴をあけて内部がみえるようにし、そこに型で制作された管を配置する。管にはわざと型制作の跡(バリ)を残し、人工物であることを強調するが、一方で焼き締め陶による「自然」さを全体に纏わせているなど、やきものの鑑賞における伝統的な見方を巧みに利用した八木らしさが発揮された1点。 取 得 額 : 4,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
18 	種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 鏡 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 53.0 (h) × 30.0 × 13.0 cm 解 説 : 「鏡」というタイトルがつく鏡台を造形化したかのような作品。周囲が鉄釉で、鏡部分が伊羅保釉で装飾されている。ただし、鏡と思われる部分は、いわゆる平らではなく、両端から中央部分にむかって奥へとカーブし、中央部分には細い隙間があいている。このように八木の造形には「空間」を様々に取り入れたものが多いが、それはやきもの固有の内部空間を時に象徴的に、時に直接的に表現するための手法だといえる。 取 得 額 : 4,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
19 	種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 壁体 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 39.5 (h) × 56.5 × 6.0 cm 解 説 : 半円形の扁平な形状の作品。赤土に白化粧が施される。八木を代表する造形手法である蹴寄せ手を使って、土の裂け目から内臓が外に飛び出してくるかのような表現がなされるとともに、下部には指を使って描かれた反復される線がリズムよく並ぶ。一方で硬い突起物を使って描かれた線が全面に展開している。人工的な造形に自然性を纏わせることでやきものらしさを感じさせる八木の特徴がよくわかる作品。 取 得 額 : 3,500,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

20		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 壁体 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 52.0 (h) × 68.5 × 6.5 cm 解 説 : 板状の扁平な作品で、赤土に白化粧が施されている。全面に指で土をひっかくことで短い線をリズムよくつけ、その後、中央に指で丸 (円) を描いている。丸 (円) は禅画から同時代に活躍した具体美術協会の吉原治良に至るまで様々に用いられてきたテーマだが、その造形要素を飄々と自作に取り込むことで、思想的な意味付けを求める時代の風潮をあざ笑っているかのようである。 取 得 額 : 6,500,000円 展 示 予 定 : 本年度の走泥社再考展に使用予定
21		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 壁体 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年頃 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 31.8 (h) × 47.0 × 7.5 cm 解 説 : 二枚の板状の土が前後に内部に空間を持つように張り合わせられ、部分的に皺寄せ手の手法がとられている。一部を残し、黄釉が掛けられている。このような造型は八木の友人でもあった辻吾堂が得意としたものである。同形の一連の作品からは、辻と八木の互いの影響関係と彫刻家と陶芸家による造形意識の違いが窺える。 取 得 額 : 2,500,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
22		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 作品 制 作 年 : 1964 (昭和39) 年頃 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 73.5 (h) × 9.0 × 8.3 cm 解 説 : 皺寄せ手の手法による長い筒状の作品。釉薬は黄釉がかかる。八木は陶のオブジェで知られているが、同時に器物制作からも離れることがなかった。しかし、何を作ってもオブジェになるといわれることもあったように、器物制作においても八木の独自性が際立っている。 取 得 額 : 1,200,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
23		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 信楽長壺 制 作 年 : 1966 (昭和41) 年頃 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 50.5 (h) × 9.0 × 9.0 cm 解 説 : 八木は若いころは他の京焼の作家同様に、京都の共同窯 (登り窯) で焼成していたが、公害問題で登り窯が使えなくなると主に電気窯で制作をするようになる。しかし、八木は1966年に信楽の穴窯を用いて多数の作品を制作しており、本作もその時のものと考えられる。長型の壺に自然釉がかかり、八木独特の造型性よりも、やきものの「味」が素直に感じられる作品となっている。 取 得 額 : 1,200,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

24		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 作品 制 作 年 : 1960年代 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 18.0 (h) × 16.9 × 17.2 cm 解 説 : 立方体が斜めに立ち上がる形状の作品。こうした作品は八木とともに走泥社の創立同人の一人である鈴木治も1950年代半ばに制作している。八木は六面のうちの一面にイッチンの手法で抽象的な文様を描き、他の面では鉄絵と併用して帯状の装飾とする。意図的にあけられた空間が造形に変化をもたらしている。 取 得 額 : 2,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
25		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 黒陶作品 制 作 年 : 1960年代 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 44.5 (h) × 23.5 × 21.0 cm 解 説 : 直方体の箱型の作品中央から、足あのような形状が飛び出した造形。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取 得 額 : 3,500,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
26		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 白い箱 制 作 年 : 1971 (昭和46) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 33.0 (h) × 23.5 × 24.0 cm 解 説 : 第34回走泥社展に出品された一連の箱や本の作品の内の1点。タタラ板で成形された箱の上部を開き、やきものが持つ内部空間を箱の形を模して象徴的に表現する。表面は化粧土が施され、尖った道具を用いてアルファベットによる「ALONE」という文字が様々な筆致で描かれている。 取 得 額 : 7,500,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
27		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : 黒の波 制 作 年 : 1972 (昭和47) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 28.0 (h) × 55.0 × 26.0 cm 解 説 : 楕円柱の形状をもとにして、波を思わせるうねりが造形化された作品。同様の形状で「衣」とつけられた作品もあるが、いずれにしてもある動きを形象化したものだといえる。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取 得 額 : 4,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

28	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：亀 制作年：1973（昭和48）年 材質・形状：陶器 寸法：11.0(h)×20.0×15.0 cm 解説：上部が切り取られた半球状の形状に、型で成形された同形状のパーツで頭、尾、手足が表現され、亀がひっくり返った状態が抽象的に表されている。表面には伊羅保釉が掛けられる。八木は轆轤やタタラ、手びねり、型成形など、それぞれの特性を十分に理解したうえで作品制作を行う作家である。亀は本作の他にもいくつか制作されているが、いずれも小さいながらも愛嬌のある作品に仕上がっている。 取得額：2,500,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
29	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：動機について 制作年：1973（昭和48）年 材質・形状：陶器 寸法：20.5(h)×45.0×22.0 cm 解説：楕円柱の上部に小判型の造形が中心をずらしてつけられた、シンプルな作品。八木はこのような抽象化された作品に詩的なタイトルを付けることを好んだが、本作はその代表的な1点。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：4,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
30	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：衣A 制作年：1973（昭和48）年 材質・形状：陶器 寸法：38.0(h)×23.0×17.0 cm 解説：楕円柱の上部を斜めにし、両端に有機的な膨らみをつけている。具体物を形象化したものというよりは布の柔らかなイメージを抽象的に作品化したものといえる。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：4,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
31	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：衣B 制作年：1973（昭和48）年 材質・形状：陶器 寸法：24.5(h)×41.5×17.5 cm 解説：楕円柱を基本とし、うねりを伴う造形が上部に施される。具体物を形象化したものというよりは布の柔らかなイメージを抽象的に作品化したものといえる。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：4,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

32 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918~1979) 作品名 : 黒陶作品 制作年 : 1973 (昭和48) 年頃 材質・形状 : 陶器 寸法 : 30.5 (h) × 25.0 × 21.5 cm 解説 : 楕円柱を基本形態とし、上部にしわが寄ったような半球状の物体と斜めに切り取られたような造形処理が施されている。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額 : 2,000,000円 展示予定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
33 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918~1979) 作品名 : 示 制作年 : 1974 (昭和49) 年 材質・形状 : 陶器、鉄 寸法 : 39.5 (h) × 24.0 × 25.0 cm 解説 : 八木は黒陶で、抽象的な形態の作品を制作する一方で自身の手を象った「手」の連作を手がけている。両掌をスバッと断ち切ったように仕上げ、その両手間の距離によってやきものの空間を象徴的に表している。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額 : 7,000,000円 展示予定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
34 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918~1979) 作品名 : 密着の距離 制作年 : 1974 (昭和49) 年 材質・形状 : 陶器 寸法 : 30.0 (h) × 40.0 × 17.0 cm 解説 : 八木は黒陶で、抽象的な形態の作品を制作する一方で自身の手を象った「手」の連作を手がけている。この連作において八木は両手間の距離を形象化することで、やきものが有する空間を象徴的に表しているが、本作はタイトル通り「密着」させることで逆に距離を想像させるものである。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額 : 7,000,000円 展示予定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
35 	種別 : 陶芸 作者名 : 八木一夫 (1918~1979) 作品名 : 缶相 制作年 : 1975 (昭和50) 年 材質・形状 : 陶器 寸法 : 38.0 (h) × 12.5 × 10.5 cm 解説 : 道端で拾った潰れた空き缶を題材とした作品。同様の作品を友人であった彫刻家の辻晉堂も制作しており、両者の影響関係が伺える。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額 : 4,500,000円 展示予定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

36	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：三角 制作年：1975（昭和50）年 材質・形状：陶器 寸法：46.0(h)×35.0×5.1 cm 解説：題名通りの三角形の形状の作品。同様の意図によるものとして八木は《方》や《円》なども制作している。円筒を曲げたような造形だが、両端は鋭く切断されたかのように仕上げられており、胴部との質感の対比を通じて陶の素材感が表現されている。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：4,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
37	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：黒陶作品 制作年：1977（昭和52）年頃 材質・形状：陶器 寸法：55.0(h)×27.5×26.5 cm 解説：円筒形の台座に球体の一部を切り取ったかのような、まるでヘルメットをかぶる人物の頭部のようにも見える作品である。黒陶においては単純化された抽象形態を好んだ曲面と直線の対比が造形化された八木らしい一点。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：3,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
38	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：黒陶作品 制作年：1977（昭和52）年頃 材質・形状：陶器 寸法：56.0(h)×23.0×10.0 cm 解説：斧のような形状の作品で上部の一部に鉛板が張り付けられている。黒陶と鉛板を併用する作品は八木の晩年によく見られるが、これは両者の質感の対比を通じて素材感を顕在化させる試みだと考えられる。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：3,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
39	★ 種別：陶芸 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：黒陶作品 制作年：1977（昭和52）年頃 材質・形状：陶器 寸法：15.0(h)×25.0×19.0 cm 解説：有機的な土の素材感と曲面の構成による抽象化された単純な形態の作品。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取得額：1,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

40		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918~1979) 作 品 名 : 黒陶作品 制 作 年 : 1977 (昭和52) 年頃 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 一対 : 各24.5(h)×15.2×15.2 cm 解 説 : 発芽を思わせる造形による一対の作品。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取 得 額 : 1,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
41		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918~1979) 作 品 名 : 陶斧 制 作 年 : 1978 (昭和53) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 36.4(h)×21.2×17.4 cm 解 説 : 幾何学形の胴部から円筒形が伸びる形状で、陶斧と題名がついているように地面に斧を振り下ろした様が造形化された作品。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。本作は部分的に幾何学文が施された黒陶の上から朱色の顔料で彩色されている。色彩の対比によって土の在質感が際立っている。 取 得 額 : 7,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
42		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918~1979) 作 品 名 : 教義 制 作 年 : 1978 (昭和53) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 22.9(h)×17.0×26.5 cm 解 説 : 立方体に溝を作り、そこから棒状の部分を差し込むなどした作品。この時期、八木は同様の仕組みによる作品をいくつか制作しているが、いずれも明確な構造を作品に持たせるというよりは、抽象的なイメージを単純な形態で表現したものとなっている。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取 得 額 : 4,500,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
43		種 別 : 陶芸 作 者 名 : 八木一夫 (1918~1979) 作 品 名 : 面目 制 作 年 : 1978 (昭和53) 年 材 質 ・ 形 状 : 陶器 寸 法 : 44.0(h)×37.0×6.5 cm 解 説 : 衝立状の形状の上半分を斜めに区分けし、片方の端からもう一方の端にかけて体積を減じていくという数学的に計算された作品。黒陶は表面を磨き、炭素を吸着させる古代中国に源流を持つ土器の一種。八木はその独特の質感を再発見し、亡くなるまで自身の表現における主要な柱の一つにおいた。 取 得 額 : 3,500,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定

44	★ 種別：彫刻 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：呪者 制作年：1969（昭和44）年 材質・形状：ブロンズ 寸法：45.0(h)×16.0×16.0 cm 解説：1969年に八木はブロンズによる彫刻作品を制作し個展で発表している。八木のブロンズ作品は、土とは異なる金属の持つ強度を造形に生かしたものがあ一方で、土の造形感覚をそのまま他素材を通じて表現した作品も多い。本作は立方体、円筒、球体、三角錐という幾何学形の組み合わせによるもので、金属による明確な形態表現となっている。 取得額：3,500,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定	
45	★ 種別：彫刻 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：作品 制作年：1969（昭和44）年 材質・形状：ブロンズ 寸法：36.0(h)×15.0×15.0 cm 解説：1969年に八木はブロンズによる彫刻作品を制作し個展で発表している。八木のブロンズ作品は、土とは異なる金属の持つ強度を造形に生かしたものがあ一方で、土の造形感覚をそのまま他素材を通じて表現した作品も多い。本作は立方体から半球状の形態が上方に伸びた作品である。八木は立方体など基本となるパーツの組み合わせを変えることでいくつかのパターンを展開させている。 取得額：2,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定	
46	★ 種別：彫刻 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：肖像あるいは鏡 制作年：1969（昭和44）年 材質・形状：ブロンズ 寸法：31.0(h)×20.0×11.0 cm 解説：1969年に八木はブロンズによる彫刻作品を制作し個展で発表している。八木のブロンズ作品は、土とは異なる金属の持つ強度を造形に生かしたものがあ一方で、土の造形感覚をそのまま他素材を通じて表現した作品も多い。本作は単純な立体物を半分に切ったものを組み合わせた形上で上部の半球状の断面には金メッキが施されている。タイトル通り抽象的な人物像に見えるとともに、神聖な鏡のようにも見える、多義的な作品である。 取得額：2,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定	
47	★ 種別：彫刻 作者名：八木一夫（1918～1979） 作品名：融合への分離 制作年：1969（昭和44）年 材質・形状：ブロンズ 寸法：28.5(h)×16.5×14.0 cm 解説：1969年に八木はブロンズによる彫刻作品を制作し個展で発表している。八木のブロンズ作品は、土とは異なる金属の持つ強度を造形に生かしたものがあ一方で、土の造形感覚をそのまま他素材を通じて表現した作品も多い。本作は球体が上部に離れていく様、あるいは一体化する様を形象化したもので、単純な形態を通じて人々の想像力を掻き立てるところに八木の造形的特徴が窺える。 取得額：2,000,000円 展示予定：一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定	

48		種 別 : ガラス 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : U管 制 作 年 : 1967 (昭和42) 年 材 質 ・ 形 状 : ガラス 寸 法 : 二点34.5(h)×6.5×3.0 cm 22.0(h)×8.5×3.0 cm 解 説 : 1967年に八木は走泥社展にガラス作品を出品している。八木の陶器以外の仕事は、ブロンズや版画などがあるが、ガラスは瞬間的に形を決定する必要があることから、他の仕事とは異なる性質を有している。本作は細長いガラスの管をU字状に曲げたもので、素材の状態がそのまま造形化されている。 取 得 額 : 2,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
49		種 別 : ガラス 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : ガラ枕 制 作 年 : 1967 (昭和42) 年 材 質 ・ 形 状 : ガラス 寸 法 : 13.5(h)×33.5×14.0 cm 解 説 : 1967年に八木は走泥社展にガラス作品を出品している。八木の陶器以外の仕事は、ブロンズや版画などがあるが、ガラスは瞬間的に形を決定する必要があることから、他の仕事とは異なる性質を有している。本作は枕のような形態の太い中空のガラスのオブジェである。透明なガラスの上から青みを帯びたガラスが被せられており、ガラスの透明感と中空構造が色彩的な変化を演出している。 取 得 額 : 2,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
50		種 別 : ガラス 作 者 名 : 八木一夫 (1918～1979) 作 品 名 : オパール長瓶 制 作 年 : 1967 (昭和42) 年 材 質 ・ 形 状 : ガラス、木 寸 法 : 79.0(h)×9.0×9.0 cm 解 説 : 1967年に八木は走泥社展にガラス作品を出品している。八木の陶器以外の仕事は、ブロンズや版画などがあるが、ガラスは瞬間的に形を決定する必要があることから、他の仕事とは異なる性質を有している。本作は木製の立方体の台に細長い瓶が据え付けられた作品である。ガラスが溶けた状態で長く引っ張ったもので、単純な造形を通じて素材の特性を強く感じることができる。 取 得 額 : 2,000,000円 展 示 予 定 : 一連の八木作品については、2024年度以降のコレクション展で順次紹介予定
51		種 別 : 染織 作 者 名 : 草間詰雄 (1946～) 作 品 名 : windscape-20 制 作 年 : 1992 (平成4) 年 材 質 ・ 形 状 : 綿糸、二重織 寸 法 : 110.0(h)×250.0×2.0 cm 解 説 : 本作は、草間がアメリカから帰国後に京都を拠点に活動していた時期に制作されたもので、カラリストとしての草間の色彩感覚が十分に発揮されている。紫色を基本に置き、色相環で見るような色の関係性をもとに錯視や錯覚を感じさせるような幾何学的な図形を描き出すとともに、作品の凹凸を通じて色彩の響きあいを増幅させている。 取 得 額 : - 展 示 予 定 : 2024年度のコレクション展で展示予定

52	種別	陶芸
	作者名	キティ・リックス (1901～1951)
	作品名	メリーゴーランド
	制作年	1929 (昭和4) 年
	材質・形状	陶、釉薬
	寸法	28.0 (h) cm
	解説	キティ・リックスは、ウィーン出身で京都に暮らしたデザイナー上野リチ＝リックスの実妹。リチ同様ウィーン工房に所属し、陶芸部門で制作を行った。本作品には、キティの名前の刻印はあるものの、モデル番号の刻印がないため、工房の職人が製作したロット製品ではなく、キティ自身の手になる貴重なオリジナル作品であると考えられる。メリーゴーランドに興じる人々の情景が、暖色を基調にして愉しげに、そして幻想的に表現されている。
	取得額	4,400,000円
	展示予定	2024年度以降のコレクション展で展示予定
53	種別	陶芸
	作者名	キティ・リックス (案) (1901～1951)
	作品名	騎手と二頭の馬
	制作年	1928 (昭和3) 年
	材質・形状	陶、釉薬
	寸法	18.4 (h) × 20.8 × 14.0 cm
	解説	ウィーン工房陶芸部門で制作を行ったキティ・リックスの作品。本作品は、キティの雛形(モデル)に基づき、工房の職人が製作したロット製品。馬はキティが好んだモティーフで、本作品では男女と思われる二人が仲良く馬に乗る様子が、人馬の愛らしい表情や晴れやかな色使いで表されている。
	取得額	2,145,000円
	展示予定	2024年度以降のコレクション展で展示予定
54	種別	油彩画
	作者名	小出檜重 (1887～1931)
	作品名	裸女結髪
	制作年	1927 (昭和2) 年
	材質・形状	額／油彩、麻布
	寸法	59.5 × 48.7 cm
	解説	大正の個性派の一人とされる小出檜重(1887-1931)は俗に「裸婦の檜重」と呼ばれるほど裸婦画を得意としたが、現存する裸婦の作例は油彩画では30点程度と考えられ、中でも代表作として評価されるのが本作品である。アンリ・マティスの《髪結い》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー蔵)に倣い、対角線と垂直線による知的な構図と明確な明暗で身体フォルムを誇張し、結髪の作業に没頭する女性の背面を間近に見るような距離感によって親密なエロティシズムを演出する。
	取得額	77,000,000円
	展示予定	購入直前の2022年度冬にも第4回コレクション展で展示したが、2023年度にも秋の第3回コレクション展で展示する予定がある。
55	種別	日本画
	作者名	深田直城 (1861～1947)
	作品名	瀑布に鷹・雪中鴛鴦図
	制作年	1895 (明治28) 年
	材質・形状	軸(双幅)／絹本着色
	寸法	(各) 139.3 × 83.8 cm
	解説	滋賀県出身の深田直城は、森川曾文に師事して四条派の写生技法を修得し、京都府画学校に出仕した後、大阪に移住して写生派の重鎮として多くの弟子を育てた。本作は住友家の旧蔵品であることがわかっており、本作とほぼ同図様の望月玉溪《夏冬之図》を泉屋博古館東京が収蔵している。住友家は明治28年(1895)に明治天皇へ円山応挙《瀑布蒼鷹・雪中水禽双幅》を献納しており、題名から本作と関連するものと推察される。つまり、本作は住友家が大切にしていたと考えられる応挙作品を模写したものであり、その出来栄から直城の代表作とも言えるものである。
	取得額	4,950,000円
	展示予定	2023年度第4回コレクション展 (2023/12/21～2024/3/10) にて展示予定

56	種別	日本画
	作者名	三木翠山（1883～1957）
	作品名	大井川渡輦
	制作年	1922（大正11）年頃
	材質・形状	軸／絹本着色
	寸法	155.1×51.0 cm
	解説	竹内栖鳳門下で学んで文展や帝展などの官展を中心に活躍し、美人画の名手として知られた三木翠山の作品。本作は東海道一の難所として知られた大井川の川越えを描いたものである。大正11年（1922）、翠山は東海道五十三次に挑戦するような気持ちで、「東海道五十三次女人道中」とも称される計画を実行した。江戸時代の衣装等で扮した舞妓をスケッチしていく取材旅行で、この取材旅行に関する翠山の自筆原稿には、「静岡県大井川の磴台渡しは人夫五十名を雇いて渡河する」とあり、大がかりな再現をしたことがわかっている。本作はその壮大な計画の成果として重要な作品である。
	取得額	1,500,000円
	展示予定	2024年度コレクション展にて展示予定
57	種別	染織
	作者名	志村ふくみ（1924～）
	作品名	三部作 青湖
	制作年	2015（平成27）年
	材質・形状	紬織／絹糸、藍、玉葱
	寸法	176.0×141.0 cm
	解説	志村の作品の特徴は、自然界の植物を丹念に採取して絹糸に染めることで得た豊かな色彩のハーモニーにある。本作は、「青湖」、「雪炎」、「蘆刈」による三部作のうちの1点である。「青湖」では、水平線の連なりが湖の波間を思わせる意匠となっている。これらの作品はそれぞれが固有の魅力を有しながらも志村が重視する藍色、白色、黄金色の三色が互いに関連性を持って成立している。
	取得額	－
	展示予定	2024年度のコレクション展で展示予定
58	種別	染織
	作者名	志村ふくみ（1924～）
	作品名	三部作 雪炎
	制作年	2015（平成27）年
	材質・形状	紬織／絹糸、白樫、百日紅
	寸法	172.5×137.0 cm
	解説	志村の作品の特徴は、自然界の植物を丹念に採取して絹糸に染めることで得た豊かな色彩のハーモニーにある。本作は、「青湖」、「雪炎」、「蘆刈」による三部作のうちの1点である。「雪炎」では上部と下部の水平線の密度の差が風に舞う雪が山を白く染める情景を想起させる。これらの作品はそれぞれが固有の魅力を有しながらも志村が重視する藍色、白色、黄金色の三色が互いに関連性を持って成立している。
	取得額	－
	展示予定	2024年度のコレクション展で展示予定
59	種別	染織
	作者名	志村ふくみ（1924～）
	作品名	三部作 蘆刈
	制作年	2015（平成27）年
	材質・形状	紬織／絹糸、玉葱、百日紅
	寸法	177.2×137.0 cm
	解説	志村の作品の特徴は、自然界の植物を丹念に採取して絹糸に染めることで得た豊かな色彩のハーモニーにある。本作は、「青湖」、「雪炎」、「蘆刈」による三部作のうちの1点である。「蘆刈」は能に題材を求めているが、水平線を強調しつつも格子状の文様構成が妻と夫の重なり合う運命を暗示させる。これらの作品はそれぞれが固有の魅力を有しながらも志村が重視する藍色、白色、黄金色の三色が互いに関連性を持って成立している。
	取得額	－
	展示予定	2024年度のコレクション展で展示予定

60		種 別 : その他 作 者 名 : 笠原恵実子 (1963～) 作 品 名 : This Sentence Is Not Composed of Eight Words. 制 作 年 : 1991 (平成3) 年 材 質 ・ 形 状 : 大理石、タイル、アルミニウム、エナメル加工された皮革、切り文字 寸 法 : (各) 67.5×90.0×90.0 cm 解 説 : 笠原恵実子は1990年頃から女性と社会との関係性を問う作品を制作してきた。本作は、「この文章は8つの単語から成立していない」を意味しながら、8語から成るタイトルが示す通り、言語とパラドクスをテーマとしている。本作は海外展出品歴をもつ初期の大作であり、言語への関心や二元的思想、手の痕跡の排除といった、「女性の身体」のみに限定されない笠原の作風の萌芽が窺える。 取 得 額 : - 展 示 予 定 : 将来的にコレクション展にて展示予定
61		種 別 : その他 作 者 名 : 河口龍夫 (1940～) 作 品 名 : 位置 制 作 年 : 1969 (昭和44) 年 材 質 ・ 形 状 : 京都市内地図、油性ペン 寸 法 : 91.7×71.7 cm 解 説 : 河口龍夫は目に見えないものの存在を、鉛や種子など様々な物質と関係づけることで、観る者の心象として浮かび上がらせる作品を制作してきた。本作は、京都市内で開催された若手グループ展「野外造形展」の出品作。同展で作品を実際に展示した位置が、地図上にマークされている。Google マップのない時代に自らの存在を俯瞰的に位置づける視点を作品化している。京都/日本におけるコンセプチュアル・アートの同期的受容の一面を示す秀作。 取 得 額 : - 展 示 予 定 : 2024年度にコレクション展にて展示予定
62		種 別 : その他 作 者 名 : 北山善夫 (1948～) 作 品 名 : 一つの合理性 制 作 年 : 2020 (令和2) 年 材 質 ・ 形 状 : 木 (椿、榿、樺、桧)、竹、美濃紙、銅線、アクリル絵具、鉛筆 寸 法 : 118.0×100.0×90.0 cm 解 説 : 北山善夫は京都出身の美術家で、1980年代から90年代にかけて、竹と紙による有機的な形態と明快な色彩の大型立体レリーフで国際的な評価を確立し、数多くの美術館に作品が収蔵されている。本作は2021年に30年ぶりに制作・発表された立体レリーフ作品で、初期の自身の仕事を回顧しつつ、新しい方向性を模索するものとして注目に値する。 取 得 額 : - 展 示 予 定 : 将来的にコレクション展にて展示予定
63		種 別 : その他 作 者 名 : 竹村京 (1975～) 作 品 名 : Floating on the River 制 作 年 : 2021 (令和3) 年 材 質 ・ 形 状 : 日本製絹糸、絹製オーガンジー、布にインクジェットプリント 寸 法 : 360.0×840.0 cm 解 説 : 竹村京は東京藝術大学在学中に奈良を訪れた際に日本最古の刺繍『天寿国繡帳』を見学し、絹糸や刺繍の耐久性と存続性に感銘を受けたことから、刺繍を用いた創作やパフォーマンスを行っている。刺繍と写真を組み合わせた作品で、シドニーの空港で撮影したモノクロとカラーの風景写真と、日用品を刺繍で施した白布が重ねられることで、重層的な時空間が表現されている。写真表現の新たな方向性を示す作例。 取 得 額 : - 展 示 予 定 : 2023年度コレクション展で展示予定

64	★ 種別：その他 作者名：森村泰昌（1951～） 作品名：星男（ビデオ） 制作年：1990/2016（平成2/28）年 材質・形状：シングルチャンネル・ビデオ（白黒・カラー、サウンド、13分18秒）、真空管テレビ、樹脂製オブジェ（USB内蔵） 寸法：テレビ：18.0×18.0×13.0cm、オブジェ：51.0×46.0×50.0cm 解説：森村泰昌は1980年代から自らの身体を使って西洋名画や著名人に扮したセルフポートレート写真のシリーズで知られる。ビデオと写真シリーズからなる本作は、後頭部を星形に刺ったデュシャンのポートレート（マン・レイ撮影）を元に、森村扮するデュシャンが、京都の美術館が所蔵するデュシャン作品に会いに行くという設定。森村が、マン・レイとデュシャンの協働に最も深く迫った、初期の映像作品である。 取得額：－ 展示予定：2023年度もしくは2024年度にコレクション展にて展示予定
65	★ 種別：陶芸 作者名：深見陶治（1947～） 作品名：屹 制作年：2013（平成25）年 材質・形状：磁器 寸法：198.0(h)×51.0×44.0 cm 解説：本作は、深見独自の技術である圧力泥漿鑄込みによって制作された作品である。透き通るような青白磁の釉薬がかけられ、上方に向かって屹立するかのように御影石の台座に固定されている。日本刀を想起させる優美な反りによる造形は、わびや土味など「茶道」の美学を下敷きにして作品を評価してきた日本の陶芸観を根底から変える力を有している。 取得額：－ 展示予定：2024年度のコレクション展で展示予定
66	★ 種別：陶芸 作者名：樂直入（15代 樂吉左衛門）（1949～） 作品名：焼貫黒樂茶碗〈嶺色千重〉 制作年：1989（平成元）年 材質・形状：陶器 寸法：10.8(h)×11.3×11.3 cm 解説：焼貫の手法による1990年の個展「天間」の出品作。「天間」は直入自身が作陶人生の分水嶺と述べるように、直入を語るうえでは不可欠の展覧会である。器胎は大胆に面取りされ、銅系の顔料で地文様を入れた上からたっぷりと黒釉がかかる。形に対する釉薬の流れと地文様との関係にまで神経を行き届かせた樂の初期の代表作である。 取得額：－ 展示予定：2024年度のコレクション展で展示予定
67	★ 種別：漆工 作者名：黒田辰秋（1904～1982） 作品名：朱漆三面鏡 制作年：1934（昭和9）年 材質・形状：木胎、漆、鏡、真鍮 寸法：149.0(h)×121.2×40.2 cm 解説：黒田辰秋の三面鏡。観音開きとなる上部の鏡部分は藁股を思わせる形状の背面を有し、扉の内側三面に鏡が据え付けられている。直線・箱型による構成を主体としながらも部分的に曲線を導入したこと、加えて、円形と方形の金具を全体のバランスの中で効果的に用いたことで、大型の鏡台にも拘わらず重苦しさではなく華やかな印象を与える黒田初期の代表作である。 取得額：33,000,000円 展示予定：2024年展の黒田辰秋展で使用予定
他 5 3 点／計 1 2 0 点 購入総額：407,303,800円	